「日々の理科」（第 2293 号） 2020,10,22

「晩秋の大きな蛾（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

高原には大きなガ（蛾）は少ない。いるのは小さなシャクガばかりだ。シャクガ（尺蛾）というのは、シャクトリムシ（尺取虫）が成虫になったガである。シャクガの仲間にはなかなかきれいなガが多い。

これは「トラフツバメエダシャク」というシャクガの一種だ。「翅に虎のような紋」があり、翅の下部が尖っていて、ツバメの尾に似ていて、幼虫が木の枝のように細い種類なので「エダシャク」という。漢字では「虎斑燕枝尺」となる。「成虫の特徴」と「幼虫の特徴」を組み合わせた種名（和名）というわけだ。見分けが容易なので、「入門者向け」の蛾といえる。

これは「ツバメアオシャク」（燕青尺）。半透明の翅を持った、実に美しいガだ。いずれも 5cm 程度の問題にならないほど小さなガで、夏の間だけ出現する。バーベキュウや花火を邪魔するガは、大抵このシャクガの仲間だ。

晩秋の高原ではガの姿はほとんど見なくなる。10 月下旬には氷点下になる日もあるからだ。しかし、大型のガは、むしろ晩秋によく見かける。この日も山荘裏庭の森にある庭園灯にたくさんのガがいた。

数えると、全部で９匹。森の中の灯火は珍しいので、うわさの「集会所」になっているようだ。

これは「ヒメヤママユ」Saturnia jonasii（姫山繭）だ。オスのほうが色が濃く、これはオスのようだ。２時間後に見に行ったら、全部同じ場所に静止していた。